

# 島原の夢

岡本綺堂

青空文庫



『戯場訓蒙図彙』<sup>ぎじょうくもんもうざい</sup>や『東都歳事記』や、さてはもろもろの浮世絵にみる江戸の歌舞伎の世界は、たといそれがいかばかり懐かしいものであつても、所詮<sup>しよせん</sup>は遠い昔の夢の夢であつて、それに引かれ寄ろうとするにはあまりに縁が遠い。何かの架け橋がなければ渡つてゆかれないような気がする。その架け橋は三十年ほど前から殆ど<sup>ほとん</sup>断えたといつてもいい位に、朽ちながら残つていた。それが今度の震災と共に、東京の人と悲しい別離をつけて、かけ橋はまったく断えてしまつたらしい。

おなじ東京の名をよぶにも、今後はおそらく旧東京と新東京とに区別されるであろう。しかしその旧東京にもまた二つの時代が劃されていた。それは明治の初年から二十七、八年の日清戦争までと、その後の今年までとで、政治経済の方面から日常生活の風俗習慣にいたるまでが、おのずからに前期と後期とに分たれていた。

明治の初期にはいわゆる文明開化の風が吹きまくつて、鉄道が敷かれ、瓦斯灯<sup>ガスとう</sup>がひかり、洋服や洋傘やトンビが流行しても、詮ずるにそれは形容ばかりの進化であつて、その鉄道にのる人、瓦斯灯に照される人、洋服をきる人、トンビをきる人、その大多数はやはり江戸時代からはみ出して来た人たちである事を記憶しなければならぬ。わたしは明治にな

つてから初めてこの世の風に吹かれた人間であるが、そういう人たちにはぐくまれ、そういう人たちに教えられて生長した。即ち旧東京の前期の人である。それだけに、遠い江戸歌舞伎の夢を追うにはいささか便りのよい架け橋を渡つて来たともいい得られる。しかしその遠いむかしの夢の世界は、単に自分のあこがれを満足させるにとどまつて、他人にむかつては語るにも語られない夢幻の境地である。わたしはそれを語るべき詞をことばしらない。

しかし、その夢の夢をはなれて、自分がたしかに踏み渡つて来た世界の姿であるならば、たといそれがやはり一場の過去の夢にすぎないとしても、私はその夢の世界を明かに語るあきつらことが出来る。老いさらばえた母をみて、おれはかつてこの母の乳を飲んだのかと怪しく思うようなことがあつても、その昔の乳の味はやはり忘れ得ないとおなじように、移り変つた現在の歌舞伎の世界をみていながらも、わたしはやはり昔の歌舞伎の夢から醒め得ないのである。母の乳のぬくみを忘れ得ないのである。

その夢はいろいろの姿でわたしの眼の前に展開される。

劇場は日本一の新富座、グラント將軍が見物したという新富座、はじめて瓦斯灯を用い

たという新富座、はじめて夜芝居を興行したという新富座、さしき 棧敷五人詰一間の値四円五十銭で世間をおどろかした新富座——その劇場のまえに、十二、三歳の少年のすがたが見出される。少年は父と姉とに連れられている。かれらは紙捻りこよでこしらえた太い鼻緒の草履ぞうりをはいている。

劇場の両側には六、七軒の芝居茶屋がならんでいる。そのあいだには芝居みやげの菓子や、つじうら 辻占せんべいや、花かんざしなどを売る店もまじっている。向う側にも七、八軒の茶屋がならんでいる。どの茶屋も軒には新しい花暖簾あたらしはなれんをかけて、さるやとか菊岡とか梅ばいり林とかいう家号を筆太に記した提灯ちようちんがかけつらねてある。劇場の木戸まえには座主や俳優に贈られた色々の幟のぼりが文字通りに林立している。その幟のあいだから幾枚の絵看板が見えがくれに仰がれて、木戸の前、茶屋のまえには、幟とおなじ種類の積物つみものが往来へはみ出すように積み飾られている。

ここを新富町だの、新富座だのというものはない。一般に島原とか、島原の芝居とか呼んでいた。明治の初年、ここに新島原の遊廓が一時栄えた歴史を有もっているので、東京の人はその後も島原の名を忘れなかつたのである。

築地の川は今よりも青くながれている。高い建物のすくない町のうえに紺青の空が大きい

く澄んで、秋の雲がその白いかげをゆらゆらと浮べている。河岸の柳は秋風にかかるくたびいて、そこには釣つりをしている人もある。その人は俳優の配りものらしい浴衣ゆかたを着て、日よけの頬かむりをして粋な蓑たばこい入いれを腰にさげている。そこには笛をふいている飴屋もある。その飴屋の小さい屋台店の軒には、俳優の紋どころを墨や丹や藍で書いた庵いおり看板かんばんがかけてある。居附きの店で、今川焼を売るものも、稲荷いなり鮓ずしを売るものも、その看板や障子や暖簾には、なにかの形式で歌舞伎の世界に縁のあるものをあらわしている。仔細に検査したら、そこらにあるいている女のかんざしも扇子せんすも、男の手拭うしろわも団扇うちわも、みな歌舞伎に縁の離れないものであるかも知れない。

こうして、築地橋から北の大通りに亘わたるこの一町内はすべて歌舞伎の夢の世界で、いわゆる芝居町の空気につつまれている。勿論電車や自動車や自転車や、そうした騒雑な音響をたてて、ここの町の空気をかき乱すものは一切通過しない。たまたまここを過ぎる人力車があつても、それは徐しずかに無言で走つてゆく。あるものは車をとどめて、乗客も車夫もしばらくその絵看板をながめている。その頃の車夫にはなかなか芝居の消息を諳そとらんじている者もあつて、今度の新富チヨウは評判がいいとか、猿若マチは景気がよくないとか、車上の客に説明しながら挽ひいてゆくのをしばしばきいた。

秋の真昼の日かげはまだ暑いが、少年もその父も帽子をかぶっていない。姉は小さい扇を額にかざしている。かれらは幕のあいだに木戸の外を散歩しているのである。劇場内に運動場を持たないその頃の観客は、窮屈な土間に行儀好くかしくまっているか、茶屋へ戻って休息するか、往来をあるいているかの外はないので、天気の良い日にはそろそろとながって往来に出る。帽子をかぶらずに、紙捻りの太い鼻緒の草履をはいているのは、芝居見物の人であることが証明されて、それが彼らの誇りでもあるらしい。少年も芝居へくるたびに必ず買うことに決めているらしい辻占せんべいと八橋との籠をぶら下げて、きわめて愉快そうに徘徊している。かれらにかぎらず、すべて幕間の遊歩に出ている彼らの群は、東京の大通りであるべき京橋区新富町の一部を自分たちの領分と心得ているらしく、すれ合い摺れちがって往来のまん中を悠々と散歩しているが、角の交番所を守っている巡查もその交通妨害を咎め<sup>とが</sup>ないらしい。土地の人たちも決して彼らを邪魔者とは認めていないらしい。

やがて舞台の奥で木の音がきこえる。それが木戸の外まで冴えてひびき渡ると、遊歩の人々は牧童の笛をきいた小羊の群のように、皆そろそろと繋がって帰ってゆく。茶屋の若い者や出方のうちでも、如才のないものは自分たちの客をさがしあるいて、もう幕があき

ますと触れてまわる。それに促されて、少年もその父もその姉もおなじく急いで帰ろうとする。少年はぶら下げていた煎餅せんべいの籠を投げ出すように姉に渡して、一番先に駈出してゆく。木の音はつづいてきこえるが、幕はなかなかあかない。最初からかしこまっていた観客は居ずまいを直し、外から戻つて来た観客はようやく元の席に落ちついた頃になつても、舞台と客席とを遮る華やかな大きい幕はなおいつまでも閉じられて、舞台の秘密を容易に観客に示そうとはしない。しかも観客は一人も忍耐力を失わないらしい。幽霊の出るまえの鐘の音、幕のあく前の拍子木の音、いずれも観客の気分を緊張させるべく不可思議の魅力をとくわえているのである。少年もその木の音の一つ一つを聴くたびに、胸を跳おどらせて正面をみつめている。

幕があく。『妹脊山婦女庭訓』、吉野川の間である。岩にせかれて咽むせび落ちる山川を境にして、上の方の脊山にも、下の方の妹山にも、武家の屋形がある。川の岸には桜が咲きみだれている。妹山の家には古風な大きい雛段が飾られて、若い美しい姫が腰元こしもととも一つつしよ所にさびしくその雛にかしづいている。脊山の家には簾すがおろされてあつたが、腰元のひとりひとりが小石に封じ文をむすび付けて打ち込んだ水の音におどろかされて、簾がしずかに巻きあげられると、そこにはむらさきの小袖に茶苧ちやうの袴をつけた美少年が殊勝げに経巻を



読誦よみよしている。高島屋とよぶ声がしきりに聞える。美少年は市川左団次の久我之助こがのすけである。

姫は太宰の息女雛鳥ひなどりで、中村福助である。雛鳥が恋人のすがたを見つけて庭に降り立つと、これには新駒屋とよぶ声がしきりに浴あびせかけられたが、かれの姫はめずらしくない。左団次が前髪立まえがみだての少年に扮して、しかも水の滴るように美しいというのが観客の眼を奪つたらしい。少年の父も唸るような吐息を洩しながら眺めていると、舞台の上の色や形はさまざまの美しい錦絵をひろげてゆく。

脊山かたの方は大判司清澄だいはんしきよすみ——チヨボの太夫の力強い声によび出されて、仮花道かりはなみちにあらわれたのは織物のかみしもをきた立派な老人である。これこそほんとうに昔の錦絵からぬけ出して来たかと思われるような、いかにも役者らしい彼の顔、いかにも型に嵌はまったような彼の姿、それは中村芝翫しはんである。同時に、本花道ほんはなみちからしずかにあゆみ出た切髪きりかみの女は太宰の後室定高さだかで、眼の大きい、顔の輪廓のはつきりして、一種の氣品を具そなえた男まさりの女、それは市川団十郎である。大判司に対して、成駒屋の声が盛んに湧くと、それを圧倒するように、定高に対して成田屋、親玉の音が三方からどっと起る。

大判司と定高は花道で向い合った。ふたりは桜の枝を手に持っている。

「畢ひつきよう 竟、親の子のというは人間の私、ひろき天地より観るときは、おなじ世界に湧いた虫」と大判司は相手に負けないような眼をみはつて空嘯うそぶく。  
「枝ぶり悪き桜木は、切つて接ぎ木をいたさねば、太宰の家が立ちませぬ」と、定高は凜りんとした声でいい放つ。

観客はみな酔つてしまつたらしく、誰ももう声を出す者もない。少年も酔つてしまつた。かれは二時間にあまる長い一幕の終るまで身動きもしなかつた。

その島原の名はもう東京の人から忘れられてしまつた。周囲の世界もまつたく変化した。妹脊山の舞台に立つたかの四人の歌舞伎俳優のうちで、三人はもう二十年も前に死んだ。わずかに生き残るものは福助の歌右衛門だけである。新富座も今度の震災で灰となつてしまつた。一切の過去は消滅した。

しかも、その当時の少年は依然として昔の夢をくり返して、ひとり楽たのしみ、ひとり悲かなしんでいる。かれはおそらくその一生を終るまで、その夢から醒める時はないのであろう。





# 青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「十番随筆」新作社

1924（大正13）年4月初版発行

初出：「随筆」

1924（大正13）年1月号

※原題は「歌舞伎の夢」。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 島原の夢

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>